



Kobe Shoin Women's University Repository

Title	「飼いならす」から読み解く『小さな王子さま』（2） Le Petit Prince éclairé par le mot « apprivoiser » (2)
Author(s)	木谷 吉克（KITANI Yoshikatsu）
Citation	神戸松蔭女子学院大学研究紀要文学部篇 Journal of the Faculty of Letters, Kobe Shoin Women' s University , No.1 : 1-10
Issue Date	2012
Resource Type	Bulletin Paper / 紀要論文
Resource Version	
URL	
Right	
Additional Information	

「飼いならす」から読み解く『小さな王子さま』（2）

木谷 吉克

神戸松蔭女子学院大学人間科学部

Author's E-mail Address: kitani@shoin.ac.jp

Le Petit Prince éclairé par le mot « apprivoiser » (2)

KITANI Yoshikatsu

Faculty of Human Sciences, Kobe Shoin Women's University

キーワード：サン＝テグジュペリ、絆、責任、愛、心で見える

Key Words: Saint-Exupéry, lien, responsabilité, amour, voir avec le cœur

5. 心で見なければよく見えない

王子さまと別れる前に、キツネはたいせつな「秘密」を王子さまに教える。それは「心で見なければよく見えない。かんじんなことは目では見えない」ということである。このキツネのことばは『小さな王子さま』のなかでおそらく最も有名なことばであるだろう。また、この作品を貫く最も重要なテーマを言い表すことばでもあるだろう。事実、この作品では、中の見えない帽子のようなボアの話から夜空を眺めて王子さまの星に思いをはせる語り手の話にいたるまで、目では見えず、心でしか見ることのできないもののたいせつさが繰り返し語られている。とはいえ、いったいこのことばは何を意味しているのだろうか。

内藤濯はこれを子ども心の純真さに結びつけている。

「いよいよ別れのときがくると、狐は王子にぶちまけて言う。赤裸々な砂漠での経験が、おごそかに物を言わせるのである。

『こころで見なくちゃ、物ごとはよく見えないよ。かんじんなことは、目に見えないのさ』

とかく形にとらわれがちで、形の背後にある真実を見落しがちなおとなには、まったく無縁な世界の声である。しかし、あくまで童心の透明さで生きている王子にとっては、くもり一つない声だった。」¹

内藤はここでふたつのことを言っている。ひとつは、おとなは心で見ることができないということであり、もうひとつは、「童心の透明さで生きている」王子さまは、意識はしていないにせよ、もともとものごとを心で見えていたということである。おとなは心で見ることができないのかどうかという問題にはのちに戻ることにして、王子さまはほんとうに、終始目で見えないかんじんなことを心で見えていたのかという問題について考えてみよう。

確かに王子さまは、中の見えない帽子のようなボアの絵を、ひと目見てボアに呑みこまれたゾウの絵だと見抜き、また、語り手のぞんざいに描いた箱の絵を見て、外からは見えない中のヒツジを見ることができた。しかし、王子さまがつねに外からは見えない中のものを見ることができるのなら、どうして自分の星に咲いたバラの心を読み取ることができなかったのだろうか。内藤によれば、純真な子ども心があれば、外からは見えないかんじんなことは見えるはずである。ところが、王子さまは、表面からはうかがうことのできないバラの心を読み取れなかった。その当時、王子さまはバラの花のなんでもないことばを真に受けて、バラの心を疑い、その真意を見抜くことができなかった。のちに王子さまは自分の誤りに気づいて、次のように言っている。

「その頃のぼくは、なにも理解できなかった。あの花の言うことではなくて、することで判断すべきだったんだ。あの花はぼくをかぐわしい香りでみたくしてくれていたし、心を晴れやかにしてくれていた。ぼくはけっして逃げ出したりしてはいけなかったんだ。見えすいた策略の背後に愛情を見抜くべきだったんだ。花たちってほんとに矛盾しているんだから。でもぼくはあまりに幼すぎて、あの花を愛することができなかった。」

王子さまが言っているのは、当時は「幼すぎて」花の心を読み取れなかった、しかし今ならそれはわかるということである。ということは、当時と今とのあいだに王子さまの心の成長があったということであり、当時と今とは、王子さまのものごとを見る見方が変わったということである。では、このような反省を王子さまにもたらしたものは何なのか。何が王子さまのものの見方を変えさせ、心を成長させたのか。

それこそがキツネの教えであり、キツネが王子さまに授けた「秘密」であるだろう。つまり、「心で見なければよく見えない。かんじんなことは目では見えない」というキツネのことばこそ、王子さまのものの見方を変えさせ、王子さまの心を成長させたものである。内藤が暗に言っているように、このことばは王子さまがもともと実践していたことを、はっきりとことばにして示したというようなものではない。王子さまにとっては、それは、今まで考えたこともない、まったく新しい考え方でありものの見方であった。ただ、それを理解する素地は、キツネから飼いならすということを教えられ、実際にキツネと飼いならしあうことで、すでに築かれていたということは言えるだろうと思う。

キツネのこの「秘密」は、子どものような純一な心でものごとを見なければかんじんなことは見えてこない、といったことを言っているのではないだろう。このことばの真意をとらえるには、そもそもこのことばがどんな場面で言われていたのかを考えなければならない。

王子さまとキツネがたがいに飼いならしあったあと、別れに先だって、キツネはもう一度王子さまに、地球の庭に咲くバラたちに会いに行くよう勧める。

「バラたちをもう一度見に行くといいよ。きみはきみのバラがこの世にひとつしかないことがわかるよ。さよならを言いにもどってきてくれたら、ぼくはある秘密を贈りものとしてきみにあげるよ。」

そしてバラたちが自分のバラとはまるで違うこと、自分のバラはこの世でたったひとつのかけがえのない存在であることを理解して、王子さまはキツネのもとに戻ってくる。そこで約束どおりキツネは「秘密」を教えるのである。

キツネはここで、地球の5千ものバラと王子さまのバラが、見かけは少しも変わらないのに、王子さまにはまったく違ったものに見えるわけを解き明かしているのだとすることができる。いろいろと世話をし、話を聞いてやったバラは、見かけは他のバラと少しも変わらないのに、王子さまの目にはこの世にひとつしかないかけがえのないものに映る。それは、バラを飼いならし、またバラから飼いならされ、バラのために時間をかけたことによって、バラの心の世界を知ることができるようになったからである。王子さまがバラを見るときは、そのようなバラの心の世界も見ている。バラの気心や関心や興味や考え方といったものも含めて見ている。そのような目で見ると、バラのちょっとしたしぐさや表情を見ても、それがどういう心から来たものかがわかる。心で見るとは、そのような表面に現れているものの背後にあるものを見るということである。その背後にあるものは、目で見ることのできないもの、バラの個性、性格、気心、考え方、ものの見方等、要するに、そのバラをそのバラたらしめているすべてのものであり、それこそキツネの言う「かんじんなこと」であるだろう。

地球のバラたちが、王子さまにとって「まだなにものでもない」のは、そのあいだに飼いならすという関係が築かれていないために、表面に現れ出ているものしか見ることができないからである。しかし、もし飼いならすという関係が築かれたなら、当然目に見えないものも見えてくるはずである。

「心で見なければよく見えない。かんじんなことは目では見えない」ということばは、王子さまの目に、王子さまのバラが他のバラたちとはまったく違う、この世でひとつしかないものに映るのは、王子さまがそのバラを飼いならし、またバラから飼いならされたために、バラを見る心の目が王子さまのなかに生まれたからであるということを言っているのである。言い換えれば、心でしか見えないかんじんなことは、飼いならすという手続きを経なければ見えてこない、心で見えるためには、なによりも飼いならすという手続きが必要であるということと言っているのである。このことばは、キツネが王子さまとはじめて会ったときに言っていた、「飼いならしたもののしか知ることはできないよ」ということばと、意味の上で密接なつながりがある。つまり、飼いならすことと知ることとは別のことがらではないという以前の教えを、ここでキツネは新たな視点から言い換えているのである。

王子さまが目に見えないものを、心で見ることができるようになったのは、これ以降のこ

とであるだろう。ボアに呑み込まれたゾウを見ぬき、箱の中のヒツジを見たのは、キツネによる秘密伝授以後のことである。一方、地球の庭に咲くバラたちを見て、すべて自分の星のバラとそっくりなのに驚いて自分に失望するのは、秘密伝授以前のことである。キツネと出会う以前の王子さまと以後の王子さまとは、かなりの違いがある。それを見落とさないようにしなければならない。

多くの評者が言っているように、この作品には、確かに子どもとおとなの対比、対立というものがある。キツネの登場以前は特にそうである。しかしキツネが登場してからあとは、「飼いなす」ということに焦点が移って、話はそれを中心に展開されていく。飼いなすことによる世界の変容、飼いなすことと時間をかけること、また知ることとの関係、といった話が展開されていく。そして子どもとおとなの対立もまた、この「飼いなす」という観点から再解釈されていく。

轍転夫の話のなかに出てきた「ほろきれでできた人形」で遊ぶ子どもたちのように、この作品におけるいわゆる「子ども」は、無自覚的、本能的にはあれ、飼いなすことに生きていると言えるだろう。一方、いわゆる「おとな」は、人間の本源的な生き方であるとも言える飼いなすことを忘れ、他のいろんな生き方をやってみるが、それがうまくいかない。ひとつのことに時間をかけようとしないうえ、何かを愛したり、何かを深く知ることということができる。したがって、目では見えないものを心で見ることもしない。しかし、この作品で言われている「子ども」と「おとな」を、生物学的な子どもとおとなに還元すべきではないだろう。現実世界には、子どもであっても「おとな」のような者もいるだろうし、おとなであっても「子ども」のような者もいる。この作品の王子さま自身、キツネと出会う以前は、「おとな」に近い存在であったとも言えるのである。

ところで、キツネが王子さまに伝授した秘密は、心で見なければかんじんなことは見えないということと、時間をかけなければたいせつなものは手に入らないということだけではない。もうひとつ、飼いなすしたものには責任があるということも、キツネは王子さまに教えている。飼いなすということと責任とがどのように結びつくのか、それを次章で考えていくことにする。

6. 飼いなすしたものには責任がある

« *apprivoiser* » と密接なつながりのある « *responsable* » 「責任がある」という語の翻訳でも、内藤濯は最初だけ「責任がある」と訳すものの、二度目からはすべて別なふうに移している。おそらく「飼いなす」という訳語と同様、「責任がある」もいかに重々しく、子どもの読者には難しすぎると考えたためだろう。それとともに、« *responsable* » という語も、« *apprivoiser* » 同様、内藤はそれほど重要な語であるとみなしていなかったということも考えられる。以下に原文と内藤訳、および私訳とを提示して、飼いなすことと責任について考えていきたい (« *apprivoiser* » と « *responsable* », およびそのそれぞれの訳語のところには下線を引いている)。

① Tu deviens responsable pour toujours de ce que tu as apprivoisé. Tu es responsable de ta rose...

— Je suis responsable de ma rose... », répéta le petit prince, afin de se souvenir.

内藤訳：「めんどうみたあいてには、いつまでも責任があるんだ。まもらなけりゃならないだよ、バラの花との約束をね…」と、キツネはいいました。

「ほくは、あのバラの花との約束をまもらなけりゃいけない…」と、王子さまは、忘れないようにくりかえしました。

木谷訳：「きみは自分が飼いならしたものに永久に責任があるんだ。きみはきみのバラに責任がある…」

「ほくはほくのバラに責任がある…」と、小さな王子さまは、覚えておこうと繰り返しました。

内藤訳では、「apprivoiser」が「めんどうみる」と訳されているため、飼いならすことと責任があることとのつながりがぼやけてしまっている。それだけではなく、「responsable」を最初こそ「責任がある」と訳しているものの、すぐあとでは「(約束を) まもらなけりゃならない」と意識している。これでは、このふたつの訳が、原文で同じ語の訳であるとは思わないだろう。

いずれにしても、今引用した場面で、キツネから、飼いならしたバラの花に永久に責任があると言われた王子さまは、そのときからその責任をはたすために自分の星に還ることを考え続けていたであろう。そして、そこから自分の星に還るために、ほぼ1年前に地球に降り立った地点へと向かっていた。その途中で、王子さまは語り手と出会い、キツネと同じように、語り手とも友情を深めていくことになる。そんななか、自分の星に戻る日も近いある日、王子さまは「のどが渇いて死にそうだ」と言う語り手とともに、見つかるあてもない井戸をさがしに出かける。2人は何時間も歩き続けたのち、夜明けに、まるで奇跡のように井戸を見つける。そして、井戸の水で喉をうるおすことになる。そのあとで、王子さまは語り手に、かつての約束を思い出させようとする。

② « Il faut que tu tiennes ta promesse, me dit doucement le petit prince, qui, de nouveau, s'était assis auprès de moi.

— Quelle promesse ?

— Tu sais... une muselière pour mon mouton... je suis responsable de cette fleur ! »

内藤訳：「きみは約束まもらなくちゃ」と、しずかにいった王子さまは、また、ほくのそばにきて腰をおろしていました。

「約束って？」

「ほら…ほくのヒツジにはめてやる口輪のことさ。ほく、どんなことになったって、あの花をほっとくわけにはいかないんだもの」

木谷訳：「きみは約束をまもらなければいけないよ」と、小さな王子さまは、またわたしのそばに腰をおろして、しずかに言いました。

「約束って？」

「ほら…ほくのヒツジにつける口輪のことだよ…あの花にね、ほくは責任があるんだ！」

以前、花の棘のことで諍いになり、王子さまが怒りのあまり泣いてしまったときに、語り手は王子さまの花が危ない目にあわないよう、王子さまが持ち帰るヒツジには口輪を描いてあげようと約束している。王子さまはその約束のことを言っている。ヒツジに口輪を描くという約束をまもってほしいということは、そのヒツジを持って自分の星に還る日が近いということ、暗に示していることになる。

飼いならすということでは、王子さまと語り手もまたたがいに飼いならし、飼いなされた仲である。飼いならしたのものには永久に責任があるというのなら、王子さまは語り手にも責任があることになる。しかし、王子さまは花にたいする責任を優先させる。もちろん語り手と別れることもつらいだろうし、それ以上に、「きみのそばから離れないよ」と何度も繰り返す語り手を残して去ることも心が痛むにちがいないが、語り手には飛行士という職業もあるし、修理した飛行機で無事に帰れば喜んでくれる者もあるだろう。それに世界の荒波をひとりで乗り越えていく力もある。しかし、王子さまの星にひとり残されたバラは、独力で世界と対抗することもできないとても弱い存在である。王子さまがなんとしてもバラの花への責任をまっとうしようとするのは、そのような理由からである。語り手との最後の別れの場面で、王子さまは次のように言う。

③ « Tu sais... ma fleur... j'en suis responsable ! Et elle est tellement faible ! Et elle est tellement naïve. Elle a quatre épines de rien du tout pour la protéger contre le monde... »

内藤訳:「ねえ…ほくの花…ほく、あの花にしてやらずにゃならないことがあるんだ。ほんとに弱い花なんだよ。ほんとにむじゃきな花なんだよ。身のまもりと云ったら、四つのちっぽけなトゲしか、もってない花なんだよ…」

木谷訳:「ねえ、ほくの花、ほくはあれに責任があるんだ！とっても弱い花なんだ！それにとっても無邪気な花なんだ！世界から身をまもる武器としては、とるにたらない4本のトゲしかないんだよ…」

この作品で「responsable」という語は5回出てくる（①で3回、②③でそれぞれ1回ずつ）。上で見たように、内藤訳はそれを「責任がある」「まもらなきゃならない」「約束をまもらなきゃいけない」「ほっとくわけにはいかない」「してやらずにゃならないことがある」と、すべてことばを変えて訳している。これでは「responsable」「責任がある」という語の重要性に、読者は気づくことができないだろう。

「責任がある」という言い方は抽象的でわかりにくい。すでに言ったように、内藤はおそらくこういう抽象的な語は子ども向きではないと考えて、自分の解釈をまじえて具体的なこと

ばに言い換えたのだと思う。しかし、原文はあくまで「responsible」であり、「責任がある」あるいは「責任を負う」という以外に訳しようがない。もし作者のサン＝テグジュペリがこの語では抽象的すぎて子どもには難しすぎると考えたのなら、サン＝テグジュペリ自身もっと具体的な語に変えていたはずである。しかしそうしていないのは、作者自身、「responsible」は「responsible」でなければならないと考えていたからであるだろう。この語は、その抽象性ゆえに、かえって多くの解釈の可能性を含み、ひじょうに豊かな語、読者の想像力をかきたてる語であるとも言える。

では、この飼いならしたものにたいする責任というものをどのように考えたらいいのだろうか。『小さな王子さま』では、この責任については、なんの説明もなされていない。「飼いならす」ということについては、キツネがその語を定義していたし、それが他のことがらとどのように関係するのかも作品中で語られていた。しかし「responsible」「責任がある」については、「飼いならしたものに永久に責任がある」と言うだけで、なぜそうなのか、その責任なるものがどういうことを意味するのか一切説明がない。ただ王子さまの最後の行動が、自分の星に残してきたバラの花への責任をまっとうする行為であることが示されるだけである。

実は、「責任」という概念、あるいはテーマは、サン＝テグジュペリの作品、『人間の大地』の主要なテーマのひとつであった。さらに言えば、「責任」のテーマは「絆」のテーマと切っても切れない関係にあって、『人間の大地』ではこの2つはつねに結合してあらわれていた。「飼いならす」とは「絆を作る」ことであり、「飼いならしたものに永久に責任がある」のなら、絆を作った相手にはいつまでも責任があるということになり、『小さな王子さま』においても、『人間の大地』と同様、絆と責任はひとつに結びあったテーマとなっている。実を言えば、『小さな王子さま』は、サン＝テグジュペリの作品のなかで、異質で、特異な作品ではまったくない。『小さな王子さま』で言われていることは、ほとんど『人間の大地』ですでに言われていることである。

では、『人間の大地』で「責任」はどのようなものとして描かれているのか。これについては、ギヨメのアンデス山中での遭難の話をとりあげるのが最もふさわしいだろう。

サン＝テグジュペリの同僚であり、最も親しい友でもあったギヨメが、冬のアンデス山脈横断中に行方不明になる。冬のアンデス山脈につかまれば、その寒気のゆえに生きて還ることは不可能と考えられていたため、搜索は生きたギヨメを捜しているというよりも、その遺体を捜しているといったほうが事実に近い。ところが、行方不明から7日目に奇跡的にギヨメは救助される。

収容された病院でベッドに横たわりながら、ギヨメは『人間の大地』の語り手に遭難の次第を詳しく語る。嵐に遭遇して飛行機の操縦も難しくなるなか、ギヨメはある山の火口の湖を認め、燃料が切れるまでそのまわりを旋回し、そして着陸する。機体から出ると猛烈な風のために吹き倒され、また立ち上がると吹き倒される。そこで機体の操縦席の下にもぐりこみ、雪の中に穴を掘り、積んでいた郵便物の袋で身体を包み、嵐がおさまるまで48時間待つ。

ようやく嵐がおさまり、ギヨメは歩き出す。それから5日と4晩歩き続けることになる。ピッケルもザイルも食べるものもなく、零下40度の寒気のなかをただ歩き続ける。高い峠をよじ

登ったり、切り立った岩壁を滑り降りたりして、足や膝や手から血を流しながら、それでもひたすら歩き続ける。転んでもすぐに立ち上がらなければ、雪の冷たさで身体が硬直してしまう。疲労をとるために眠ることもできない。眠ることは死ぬことにほかならない。しかし、2日、3日、4日と歩き続けると、自己保存の本能も失われ、ギヨメはもう眠ることしか願わなくなる。けれども、ギヨメはこう自分に言い聞かせた、「わたしの妻は、もしわたしが生きていると信じているなら、歩いていると信じているはずだ。仲間たちも歩いていると信じているはずだ。みんながわたしを信頼している。歩かなければ、わたしは卑怯者だ」²と。

しかし、凍傷にかかった足で、重い身体をひきずって歩かねばならないうえに、助かる見込みもほとんどなく、状況は絶望的であった。一度は転倒して雪のなかに腹ばいになり、立ち上がることをあきらめる。自分はできるだけことはした。もう希望はない。こんな苦しみの中ががんばる理由があるだろうかと、そのときギヨメは思う。そうして目を閉じ、眠りに落ちていく。次第に意識ももうろうとなっていくなか、突然あることがギヨメの心に浮かぶ。ここで死ねば、夏になれば自分の身体は泥水とともに、アンデスの無数のクレパスのひとつに流され落ちて、いつまでも発見されないだろう。けれども50メートル先に岩が突き出ている。その岩に身体を固定できれば、夏になれば自分の身体は発見されるだろう。こう考えてギヨメは再び立ち上がり、歩き出す。そう考えたのは、自分の死んだあとの妻を思っていることであり、遺体が発見されない場合は、保険のおりるのが4年間延長されるからである。

こうして立ち上がったギヨメは、さらに2晩と3日歩き続けたのち奇跡的に救出される。救出されたギヨメは、語り手に「わたしがしたこと、誓って言うが、それはどんな動物にもできなかったにちがいない」³と言う。人間を生きて還すことがないと言われている冬のアンデス山脈で、休むことも眠ることも許されず、次第に体力を失っていくなかで、ギヨメは何度も死の誘惑に駆られた。そのような状況では、そのまま眠り込んでしまうほうがどれだけ楽であっただろう。動物なら、自己保存の本能をなくして、簡単に死の誘惑に身を委ねたかもしれない。しかし、ギヨメはそうはせず、最後まで生きて還ることを諦めずに歩き続けた。ギヨメのしたことが「どんな動物にもできなかった」ことであるならば、逆に言うなら、それは人間だからこそできたということである。つまり、動物にはなく人間だけが持っている何か、ギヨメの生還を成し遂げたということになる。動物と人間を分けるその何かとはなんであるのか、『人間の大地』の語り手はそれを次のように言う。

「彼の偉大さは、おのれを責任あるものとして感じるところにある。自分にたいして、郵便物にたいして、希望をつないでいる仲間たちにたいして、彼は責任があるのだ。彼はおのれの手の中に、彼らの苦しみ、彼らの歓びを握っているのだ。」⁴

つまり、動物と人間とを分けるものは責任の観念であるというのである。ギヨメの偉大さは、自分が責任を担う者であることを自覚し、その責任をまっとうしようとしたところにあると語り手は言う。ギヨメは何よりも「希望をつないでいる仲間たち」にたいして責任があった。自分が無事生きて戻ることを願っている妻や僚友たちにたいする責任、自分と強い絆で結ばれている者たちへの責任である。

人間の絆は必然的に責任をとるもの。人間の行動は、ただその人のみに関わるのではない。

その人と絆で結ばれたすべての人にも及んでいく。一家の父親の行動は、妻や子どもたちに及んでいくし、母親の行動も同様に夫と子どもに及んでいく。もちろんそれにとどまらず、その他の多くの人に影響は及んでいくだろう。人は自分と結ばれた人たちにどのような影響を及ぼすかを考えながら、自分の行動を決めていかねばならない。自分の行動はまわりの人たちに苦しみを与えることもあれば、喜びを与えることもある。ギヨメの話に戻れば、もしギヨメが生きて還ることをあきらめ、死の安らぎに身をゆだねたなら、生きて還ることを信じ、それを強く願っている妻や僚友たちを裏切ることになっただろう。そうした人たちに大きな悲しみ、大きな苦しみを与えただろう。ギヨメには、妻や僚友たちの信頼の気持ちに応える責任があったし、彼らに悲しみや苦しみを与えたくないという強い気持ちがあったはずである。「彼はおのれの手の中に、彼らの苦しみ、彼らの喜びを握っているのだ」ということばは、そういうことを意味している。

ギヨメはただ自分の命を救うために、アンデス山脈で7日間も死と闘ったのではない。あのような状況では、死に身を委ねるほうがどれだけ楽であっただろう。事実、ギヨメは何度も死の安らぎをえたいという誘惑に駆られた。しかし、それでもなお生きることを諦めなかったのは、生きて還ることを信じ願っている妻や僚友たちにたいする強い責任の思いがあったからである。この責任の観念が、ギヨメに超人的な力を授け、妻や僚友たちのもとに再び生きた姿で戻ることを可能にしたのである。

『人間の大地』では、このギヨメの話に、ある庭師の話が続く。語り手はこの庭師をギヨメと同じように勇者であったと言っている。庭師は今、死の床にありながら、もっと生きて土を掘り起こしたいと言う。かつては土を掘り起こすという仕事に愚痴や不平も言ったが、今となっては土を掘って、掘って、掘りまくりたい、土を掘るという仕事が今では素晴らしいものに思えるというのである。それに自分が死んでしまえば、世話をしてきた樹や庭を、だれが手入れしてくれるのか。庭師は自分が手入れしてきた樹や庭にたいする責任の観念にとらえられている。自分が死ねば、樹や庭はどうなるのか。ただ荒れるにまかされるのではないか。だからこそもっともっと長く生きて、土を掘って、掘って、掘りまくりたいと庭師は思っている。自分の命が自分だけのものでなく、自分が愛し責任を感じている樹や庭のためのものでもあることを自覚している点で、この庭師はギヨメと共通する。

この責任の観念を、サン＝テグジュペリは人間固有のものであり、人間の人間たる所以であるともみなしている。ギヨメの偉大さを、ギヨメがおのれを責任あるものとして感じるところにあると述べたあと、『人間の大地』の語り手は、「人間であるということは、まさに責任を持つことだ」⁵とも言っている。つまり、責任を持つということは人間に特有のものであり、絆にともなう責任を自覚し、それをまっとうしようとすることは、まさに人間の本分であるというのである。

誤解してはならないのは、責任は義務のような外から課せられたものではないということである。それは自発的なものであり、絆に結ばれた相手、愛する相手にたいして自然に生まれてくるものであって、意識して責任を負わねばならないといったものではない。『小さな王子さま』で、キツネは王子さまに「飼いならしたものに永久に責任がある」と言うが、「永久

に」ということばは、絆が必然的に責任をともなうという意味とともに、その責任の思いは自然に生じるものであるということをも意味しているように思われる。

いずれにせよ、『小さな王子さま』に出てくる « responsable » 「責任がある」という語には、『人間の大地』で考察されていた以上のような意味が込められているのである。(続く)

注

¹ 内藤濯『星の王子とわたし』、文春文庫、1976年4月、p.96

² Antoine de Saint-Exupéry, *Œuvres complètes*, t. I, Bibliothèque de la Pléiade, Gallimard, 1994, p.194 (以下この版からの引用はOC I と略記する。) なお日本語訳は、サン＝テグジュペリ・コレクション3『人間の大地』山崎庸一郎訳、みすず書房 (p.39) による。

³ OC I , p.192 および p.196 山崎庸一郎訳『人間の大地』 p.35 および p.42

⁴ OC I , p.197 山崎庸一郎訳『人間の大地』 p.44

⁵ OC I , p.197 山崎庸一郎訳『人間の大地』 p.44

(受付日 : 2012. 1. 10)